

# 卒業論文要旨

PETITES NOTES

SUR

Quelques Poèmes D'Eluard

丸 山 幹 正

フランス語を美しいと思い始めたのは中学に入った頃であつたろう。これを使えれば幸福になれるとさえ信じていた。僕がフランスの詩に傾いた事は自然としても、卒論にしようなどゆめにも思ってもみなかった。それは単なる偶然によつた。三年以上も前、「革命の河」という映画が広島にあったのを覚えられる人もあろう。日本軍に南下を強いられた中國大陸の民衆の中によほよほの母親が疲労の余りひざ坊子で、かろうじて歩を進めていた。子供がわめいていた。この実録フィルムのカットが眼底に焼きついた。ラストシーンは灰燼と帰したバリの街角であり、あの“liberte”が流れた。それを忘れる事はなかった。作者を捜した。

Chapitre 1で詩と散文、詩の型体について古典的に概論しかつEluard達のsurrealismeについて論及、彼らの運動には単に言語の小手先の問題のみならず、それを凌駕する人の生と行動の問題が深く関わっていることを指摘した。そしてValeryの詩論を要約しつつChapitre 2では彼の説に則つとりEluardを韻律とイメージの構成面から分析しようと試みた。Chapitre 3に於ては以上の分析より得られた結果を論理的に構築しようと望つた。現代詩に理論はないとはいえ、大きな流れは把握するのではないか思った。詩の音はジャズ化していると言える。例えばe-caducを発音するか否かは読者に依ねられている。古典的なsyllabeやrimeの期則性は姿を消している。それでいて明らかに雑音とは異質のものである。ジャズと同様Ad-libitumの概念が支配的と言える。そしてイメージの分析には吉本隆明の説をないまぜて表出体が複雑化すればする程、彼はむしろ言葉を控え簡潔な表現へと向つたというパラドックスについて論及した。

叙上の如く音素から意味論へと急上昇したこのとほうもない向う見ずな拙論に於いて、筆者はただ言葉と人間の関わり合いについて、全体的な意味づけを探ってみたかったのである。あのラスト・カットに於て把らえ得た波の如き感性が俺にとって何んであつたか説うてみたかった。

Bibliographie Sommaire ;

Traité de Versification Française par W. T. Elwert.

Versification Française par Jean Suberville

Paul Eluard par Louis Parrot

フランス詩法 上下 ..... 鈴木 信太郎 著

フランス文学史 ..... 小松 清 編  
杉 捷 捷 夫

現代フランス文学 ..... 山田 九郎 訳

シュールレアリスム ..... 稲田 三吉 訳

言語にとって美とは何か I, II ..... 吉本 隆明 著

文 芸 論 ..... 九鬼 周造 著

無からの抗争 ..... 萩原 朔太郎 著

冠 詞 研 究

(ロレンスの作品中における人名を中心として)

下 井 翠

日本人にとっては、冠詞の問題は馴みにくく、英語学習に当りこの問題に随分悩まされてきた。そこで、この面倒な問題に何か理論的説明を与えるべく、「冠詞」をテーマにし、「固有名詞（人名）と冠詞について」という小テーマを選定した。

まず序論では、冠詞についてその定義、発生、歴史、従来の研究を概説し、本研究について、固有名詞と冠詞の関係にふれ、固有名詞は原則として無冠詞であるが、習慣その他の理由により冠詞をつけることを、Christophersenの言を引用し示した。研究方法はD. H. Lawren-  
ce の「息子と恋人」と「チャタレイ夫人の恋人」を選んで、その中の人名を全てカードに書取り、その中から冠詞その他の付属語が付いたものだけを抜き取り、次の様に分類して、系統立てて整理し、且つ理論的説明を与えるよう努めた。

1. 定冠詞が付いたもの
2. 不定冠詞が付いたもの
3. 無冠詞のもの